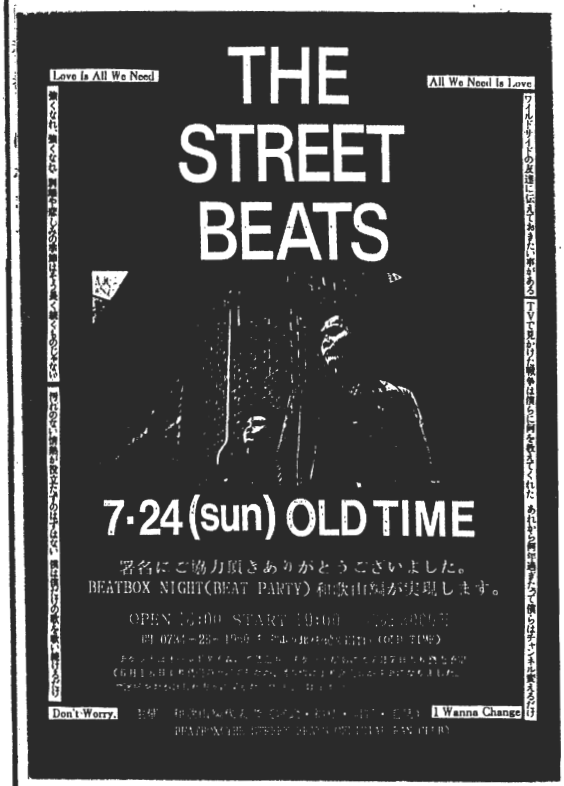
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

86号 1994.6.27
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: THE STREET BEATS 1994.5.14 新潟ウッディー

いちばん後ろでもステージから３ｍあるかないかの狭いライブハウスに観客が 100人くらい。ライブがはじまる前から汗がでるほどの熱気。私のところからはＯＫＩの顔しか見えなかったけれど、とてもいいライブだった。ＯＫＩは４月18日のパワーステーションで感じた「老けた感じ」がしなかった。それどころか「ＰＯＩＳＯＮ－神様と毒薬」を歌ったときのＯＫＩの叫びには思わず「すごいな」ってつぶやいてしまった。音響も大きなところとちがってザラザラとしているし（ＯＫＩが、ここは生音だからそれでライブがいいってことは本当に演奏がいいってことなんだと言っていた）、観客も 100人もいないのに、ちっともシラけたところのない、パワフルなロックンロールのライブにするストリート・ビーツは本当にすばらしい。ストリート・ビーツは、できたてのバンドの持つ「これしかない」っていうまっすぐなパワーと、10年やりつづけている「これしかない」っていうヘヴィな存在感をあわせもっている類いまれなロックンロール・バンドである。始めから終わりまでほとんど動かなかったのにあんなに汗だくになったライブはひさしぶりだった。充実した時間だった。

この日のライブは富山のファンの人たちの署名の結果実現したものだとステージでＯＫＩが言っていたけれど、こういうファンとの関係にもストリート・ビーツらしさが感じられてすばらしいと思う。



和歌山オールドタイムのライブもファンの人たちの署名で実現したとのこと。代表の一人になっている宮武満紀子さんは、去年の7月25日、チッタのライブで配った「ストリート・ビーツの本を作ろうと思うので読んでみたい人は手紙を下さい」というチラシをうけとってすぐに「今、ビートパーティー和歌山編＆大阪編を集めています。いつになるかわかりませんが実現したときはもしよかったらライブに来て下さい」という手紙をくれました。それからちょうど一年後の7月24日にライブが実現することになって本当によかった！

ストリート・ビーツにはすばらしいファンの人たちがたくさんいる。最近ファンになった人たちも、ずうっと以前からのファンの人たちも。それはライブのときにいつも感じるし、手紙をもらったときにも感じる。’89以来のファンの関寿子さんと、去年の12月４日のパワーステーションで初めてストリート・ビーツのライブを見たという荻野幸子さんが、５月21日の横浜 CLUB 24のライブのことを書いた手紙（右欄）をくれました。
（ちなみにこの日は狂乱のライブと重なっていて、私は狂乱の方へ行ったのデス）

LETTER: from 関寿子

21日の横浜 CLUB 24のLIVEに行ってきました。始まる前の客のビーツコールを聞いていたら“今日は何かスゴイLIVEになりそうだ”ってドキドキワクワクしてきました。そして、その予感はまさにその通りとなったのです。始めから終わりまで、本当に熱いLIVEで、私は１曲１曲全てに心から拍手を送らせていただきました。ともかく一瞬も目を離せない、という感じでした。勢いがあって。

「風の街の天使」、ドラムの音がズンスン胸に響いて、ＳＥＩＺＩのギターの音もＯＫＩの声も胸に響いてキレイでドキドキしました。どの曲だったかは覚えていないのですが、ＯＫＩの声とケンジさんのハーモニーがすごくキレイだと思うところがありました。もう本当にステージに目が釘づけでした。とくに“愛こそすべて？”。あれは不思議な体験をしました。急に目の前がパーッとひらけていく感じ…前方がパーッと明るく見えてきてＯＫＩがすっごく鮮明に見えてキラキラまぶしかった…のです。あれは本当に不思議。あんなことは初めてでした。“I WANNA CHANGE”（アンコール）も“アンコール”という感じではなく、今からLIVEが始まるんじゃないか！という感じで。この曲が始まるといつも感じるのは、体の中にあるものが何か、湧き上がってくる…血がわいてくる…（？　うーん表現が難しい…）という。“星降る夜に”も“BOYS BE A HERO”も“MEET THE BEATS”も本当に良かった！“約束できない”も20日に聞いたのよりも更に良くって胸にしみてきて良かった!!“レベルソング”でＯＫＩとＳＥＩＺＩが２人向き合ってギターをかき鳴らす…というのを見た時“ビーツだ！ビーツここにあり!!”といった感じで、本当に客とビーツが一体となった素晴らしいLIVEでした。

この日、初めて“出待ち”（？）というのでしょーか、をしてしまいました。出てきたビーツに声をかけれなかったけれど、本当にこころから“最高の夜をどうもありがとう！”と言いたいです。

LIVEREPORT: from 荻野幸子

この日のライブは開演時間がだいぶ押していた。そしていよいよストリート・ビーツの登場となった。一曲目“太陽を待っている”で始まった。イントロに続き勢いのある歌声が聞こえてくる。おお！ＯＫＩだ！っていう感じだった。ストリート・ビーツを見るのは、今回で二回目。パワステで（ 93.12.4横道坊主と対バン）始めてＯＫＩを見たとき、すごい存在感のある人だなと思った。ステージに立っているだけで「俺はここにいる」っていうような、緊張感を漂わせている感じがした。そして、今日もやっぱり、その存在感は変わらず、おもいっきり歌っていた。なにかとても嬉しそうに歌う。水を得た魚のようというか、本当に歌うことが好きなんだなと思う。そんなＯＫＩを見ていると、自己表現の衝動に駆られているように見える。伝えたい事があるという感じを、ひしひしと感じる。なにを伝えようとしているのだろう？　ＯＫＩがいきいきとして、やさしい表情で精一杯歌っている理由は、ＯＫＩにとっては“愛こそはすべて？”だからだろうか。でも、この曲を聞いていると、誰かに語りかける口調になっているけれど、どうしても私には、ＯＫＩが自分自身に語りかけているように思える。現在のＯＫＩが過去のＯＫＩに言い聞かせているような気がする。「愛を信じない奴なんて俺は信じない」と、突き放しているものの、「愛を信じない奴なんて本当はいやしない」とも言っている。結局ＯＫＩは全ての人を見守っているように思える。そして、“I WANNA CHANGE”。この曲を聞いていると、詩の世界に引き込まれてしまう。浮かび上がってくるのは、羽を太陽に焼かれ、翔ぶことができない孤独なＯＫＩの姿、そして、歌う為に生まれてきたようなＯＫＩですら、自分の正体が、いまだに分らないという。しかし、ＯＫＩなりにその答えをだしている。「自分らしく生きるってどういうことだ、自分の殻を壊し続けることだ」と。絶望と孤独の殻を壊し、ＯＫＩが叫んでいる。

俺は翔びたい、翔び続けたい
俺は変わりたい、変わり続けたい…

ボードレールという詩人が、“信天翁（あほうどり）”という詩の中で詩人を鳥にたとえて、こんなふうに書いている。

雲居（くもい）の君のこのさまよ、世の歌人（うたびと）に似たらずや
暴風雨（あらし）を笑ひ、風凌ぎ猟男（さつを）の弓をあざみしも、
地の下界（つちのしたつよ）にやらはれて、勢子（せこ）の叫びに煩へば、
太しき双（たぐひ）の羽根（はね）さへも起居（たちい）妨（さまた）ぐ足まとひ。

空を悠々と翔ぶ羽も、煩わしい地上ではかえって邪魔になってしまう。と嘆いている…
羽をなくした天使のことを、人間というのではないだろうか？　落ちぶれた天使のことを、人間というのではないだろうか？　でも、まれに羽をもった人間がいるという事を、ＯＫＩは気づいているのではないだろうか…？　その羽ゆえに苦しむ自分と、そしてワイルドサイドの友達へ、語りかけているのではないだろうか。

最後に付け加えると「みんな集まってくれてありがとう」という言葉と「後ろまで届いてますか」という言葉が嬉しかった。強さだけではなく、優しさも身に付けたストリート・ビーツは、とても魅力的だった。温かいものが心に残ったライブだった。